

丹後半島における近年の考古学的調査から

岡 田 晃 治

1. はじめに

近年の発掘調査の増加は、新聞紙上に関連記事の載らない日がないほどの勢いをみせているが、京都府北部、丹後半島にあたる丹後・与謝地域においても、扇谷遺跡や湯舟坂2号墳など全国的に注目をあびたものがある。同地域では国営農地開発事業や圃場整備事業など各種開発に伴い発掘調査が増加する傾向にある。一方、各市町教育委員会においては担当職員が配置されるなど体制整備も進み、これに伴い、埋蔵文化財の保存と開発との調整を図る意識も高まりつつあり、独自の遺跡分布調査や試掘調査などの取り組みがなされている。筆者は近年、国営農地開発事業に伴う丹後地区遺跡分布調査のほか、いくつかの発掘調査を担当する機会を得た。本稿では、それらを通して気付いたいくつかの点について大宮町を中心に触れ、当地域の現状と若干の見通しを述べてみたい。

2. 丹後半島における考古学的調査の現状

丹後地域分布調査は、昭和56年度以降進められているが、それまでの遺跡の把握状況は各市町教育委員会等が発掘調査等によって部分的に掌握していたものはあるものの、まとまったものとしては昭和47年刊行の『京都府遺跡地図』^(注1)に頼らざるを得なかった。今回の遺跡分布調査は、国営農地開発予定地を主な対象としてきたため、当地域全域をカバーしているとはいい難い面があるが、おおよその傾向をつかむことができる。その最も大きな特徴は遺跡数の莫大ともいえるほどの増加である。各年度概報に地域を限って報告してきたところであるが、遺跡数が昭和47年当時の30倍にも及ぶ地域がある。最も広域に調査を行った大宮町を例にとって大字ごとに遺跡数を集計してみると第1表のようになる。小規模な古墳や台状墓は一区画として認められるものを1基として数え、山城については広範囲にいくつもの郭や堀切等が及ぶのが一般的であるが、このひとまとまりを1か所として集計した。したがって、発掘してみなければ判断しがたい小規模な平坦面については周囲の状況によって墳墓として数えた場合と山城の部分的な施設と考えた場合があり自ずとその数値は絶対的なものではないことを断っておきたい。また、丘陵に立地する墳墓はその丘陵稜線が、大字界にあたっていることも多く、この場合は重複をさけるため、どちら

第1表 大宮町内の遺跡集計表

大 字	集 落 散 布 地 等	墳 墓	城 跡	窯跡・経塚等	計
善 王 寺	0(0)	75(9)	3(1)	14(1)	92(11)
口 大 野	4(2)	49(11)	2(1)	1(1)	56(15)
奥 大 野	2(1)	131(12)	3(1)	0(0)	136(14)
下 常 吉	2(0)	1(1)	1(1)	0(0)	4(2)
上 常 吉*	0(0)	3(3)	1(1)	0(0)	4(4)
河 辺	1(1)	43(12)	2(1)	0(0)	46(14)
周 枳	7(2)	171(10)	2(2)	0(0)	180(14)
三 坂	0(0)	12(3)	0(0)	0(0)	12(3)
谷 内*	1(0)	28(5)	1(0)	0(0)	30(5)
三 重	1(1)	24(4)	1(2)	0(0)	26(7)
森 本*	0(0)	3(3)	0(1)	0(0)	3(4)
明 田*	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)	2(2)
五 十 河*	1(1)	5(5)	0(0)	0(0)	6(6)
久 住	0(0)	16(0)	3(1)	0(0)	19(1)
計	20(9)	562(79)	19(12)	15(2)	616(102)

* は今回調査の未完了地域である。

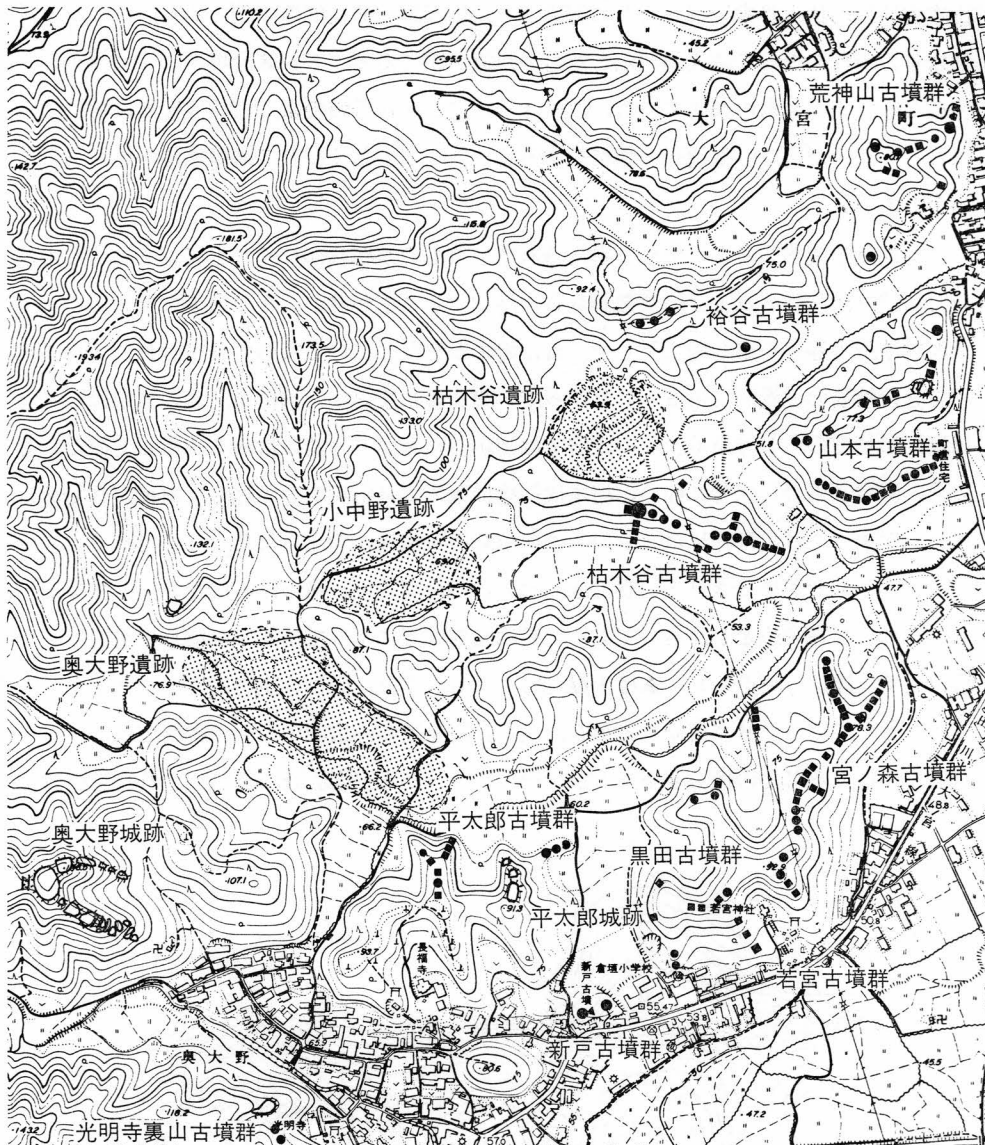
か一方で数えることとした。

なお、この集計表では、後述する発掘調査の行われた小池古墳群、帯城墳墓群、有明古墳群等の数値は、分布調査で確認したものしか数えていない。この集計表の数値そのものについては大きな意味はないが、その増加の傾向は知りうるであろう。遺跡数の増大の内容としては、集落・散布地や城跡に比べ墳墓類が顕著である。まずこのことから考えてみたい。

(1) 墳墓について

① 墳墓の調査

墳墓がこれほどの増加をみた原因は、ひとつには調査方法の充実であり、もうひとつは遺跡を認識するその判断基準の拡大である。前者は、以前の調査が聞き取りや文献からのピックアップなどによる既知分の確認が中心になったのに対し、今回はきめ細かく、かつできる限り広範囲に踏査しているためである。後者については、近年の発掘成果によるところが大きい。以前は地形観察によって墳丘のしっかり確認できるものだけが、古墳として認識されていたが、丹後町大山墳墓群、大宮町小池古墳群、峰山町七尾遺跡、福知山市豊富谷丘陵の古墳群などの発掘調査によって、樹木の茂った状況からはほとんど墳丘が認



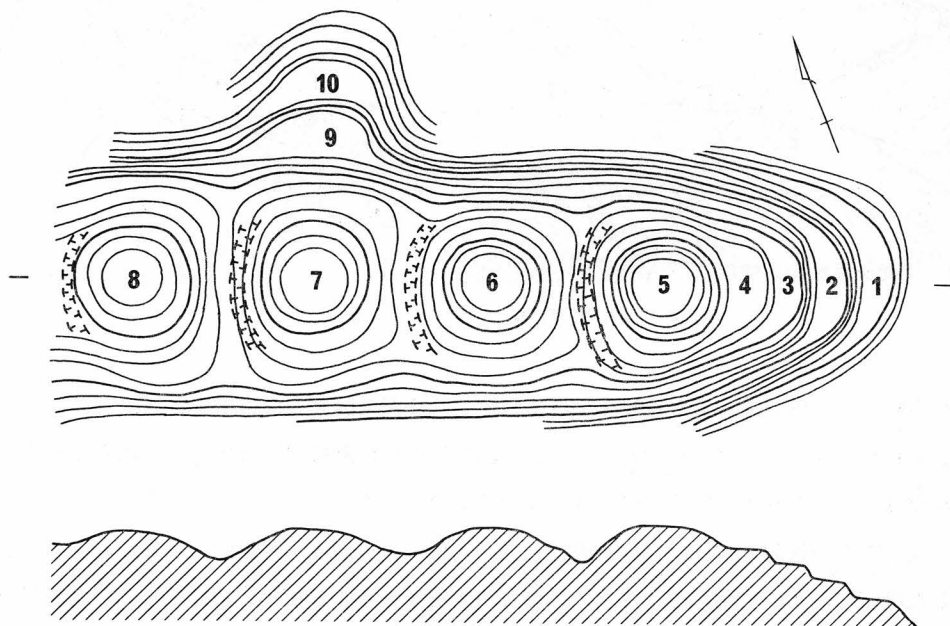
第1図 大宮町奥大野周辺遺跡分布図

められないものであっても丘陵を平坦に整形したり溝で区画した古墳や台状墓であることが明らかとなってきたためである。この状況は当地域に隣接する兵庫県但馬地方で先駆的^(注3)に調査され、これが大いに参考になっているといえよう。

大宮町内の遺跡分布状況の代表例として、奥大野周辺地域を第1図に示しておく。図示した範囲で、かつてから確認されていたものは石柵を有する横穴式石室として著名な新戸古墳(1号墳)をはじめとする8基にすぎなかった。丘陵稜線上に立地する宮ノ森古墳群、

山本古墳群、枯木谷古墳群は新たに認識された墳墓群の典型的な事例である。このうち、枯木谷古墳群の地形を模式的に示したものが第2図である。5～8号墳のように溝を有し、明確な隆起をもつものがある一方、1～4号墳や9・10号墳のように丘陵を階段状に削っただけのものがある。微地形の観察をすると、斜面が少しくびれて溝の痕跡が感じられる場合もある。

発掘調査を実施すると、墳墓と考えられていたものが明らかにそれと確認されるうえに新たな墳墓が確認されてその基数がさらに増加することが多い。その顕著な具体例として小池古墳群の様子を第3図に示した。Aは樹木が繁茂している段階の分布調査によって確認できた墳墓の位置図である。したがって、第1表にまとめた遺跡集計表の結果はこれとほぼ同じ精度のものである。この段階では図示した範囲で6基の墳墓を確認していた。その後、開発計画の具体化に伴い、樹木伐採後に改めて分布調査を実施した結果がBである。白ぬきのマークは、確証には乏しいものの墳墓の可能性が考えられたところである。A段階に比べ、地形がはっきりと観察できるため、平坦面、段、溝の窪みなどの不自然な地形から墳墓の存在を想定したものである。Cは発掘調査によって確認した墳墓の状況である。●は円墳、■は方墳を示し、▲は土壇(墓)である。また、□は弥生時代方形台状墓と考えられたものである。Bで白ぬきで示した最も丘陵先端の円墳状のものが古墳ではないことが明らかになるなどの例も若干あるが、総じて、AからCと調査が進むにつれて遺跡数は



第2図 枯木谷古墳群地形模式図

増加し、地表観察からは考えられなかった土壌(墓)や方形台状墓の存在が明らかとなっている。このような状況は、他の墳墓群についても大差ないものといえる。竹野川を挟んで、小池古墳群の対岸に立地する同町三坂の帯城墳墓群では、A段階では3か所のマークであったものが、B段階では5か所ほどになり、C段階では6基の古墳と40基余りの弥生時代の埋葬施設を検出するに及んでいる。また、同町三坂の有明古墳群では、A段階では墳墓の存在を考慮しなかった場所で2基の古墳を検出している。このような傾向が明らかになっている一方で、なおかつ分布調査では墳丘状の隆起や不自然な地形からしかチェックしきれないという欠点が依然としてある。帯城墳墓群や丹後町大山墳墓群の丘陵稜線から下った墳丘の裾部や斜面における埋葬施設や小池古墳群の土壌(墓)などの事例が増加しており、今後の調査では、なお一層微地形の観察に注意を払う必要があるだろう。

② 横穴の調査

先に墳墓の確認が困難なことについて触れたが、丘陵斜面を穿って構築する横穴についても同様である。昭和60・61年度に発掘調査を実施した大田鼻横穴群について、その調査の経緯について述べておこう。大田鼻横穴群は帯城墳墓群の同一丘陵南斜面に立地し、昭和57年度の分布調査では、注意不十分のため確認できなかったが、帯城墳墓群の調査後に同一丘陵に記されたそれに気付いた。遺跡カード等ではその詳細な位置が記載されていなかったため、再度丘陵斜面をしらみつぶしに踏査して径10cmほどのわずかな穴を確認した。しかし、それでもまだ横穴とは断定できる状況ではなかったため、試掘調査によって横穴であることを確認したが、さらに横穴が単独で存在するとは考え難いため、徐々に調査範囲を拡張して、最終的に30基の横穴の調査を完了した。最初の横穴を検出した後、この丘陵斜面の立木伐採を行ったが、その際の地形観察からは、2か所ほどの落ち込みしか確認



第3図 大宮町小池古墳群分布図

できず、検土杖によってもやっと10基ぐらいが確認できるにすぎなかった。発掘調査の結果、堆積土が1 mにも及ぶところがあり、天井が陥没している場合などは、地表観察から判断することは不可能な状況であった。谷を挟んで大田鼻横穴群と向かいあう丘陵に立地する有明古墳群の東斜面でも、A段階の分布調査では確認できなかった3基の横穴が発掘調査されたが、検土杖による調査では、さらに数基の横穴の存在が確認されている。

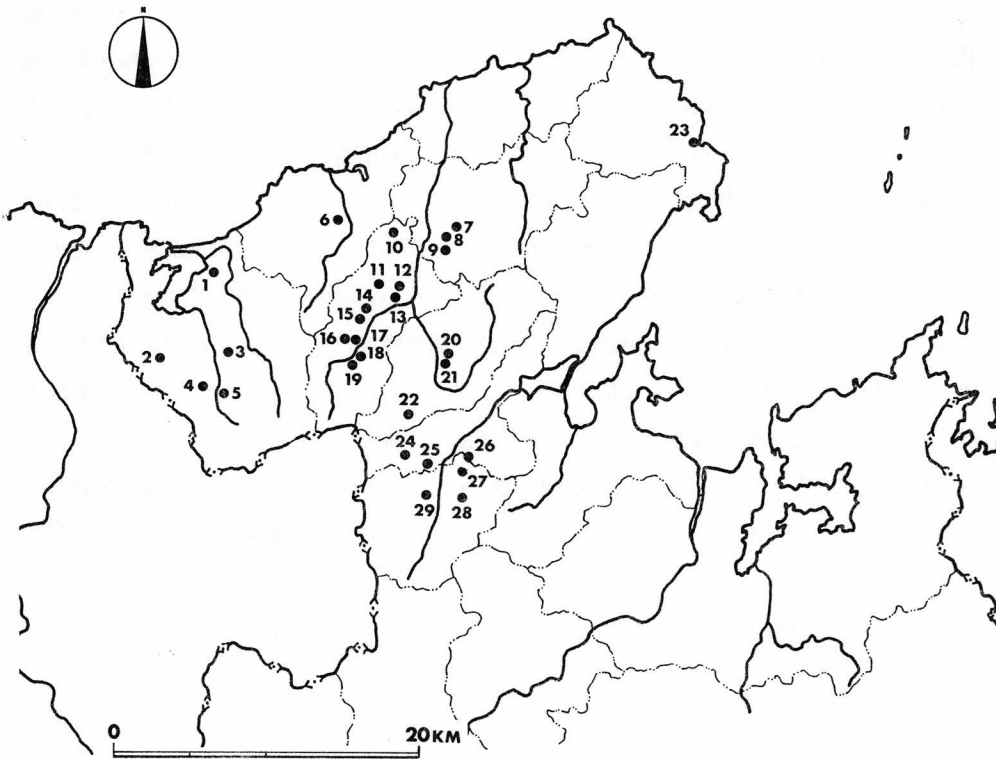
丹後半島における横穴は、昭和47年版『京都府遺跡地図』に掲載されているものに近年発見の横穴を加えると、第2表・第4図に示す29遺跡119基以上が知られている。現存する横穴は、久美浜町須田の王の宮横穴群など数基にすぎないことでもわかるとおり、横穴が発見される契機は土取りなど偶然の理由により、しかも発見後破壊されることが多い。しかし、大田鼻横穴群の例のように、さらに詳細に調査を進めれば、ますますその数は増大することが予想され、全国的な傾向に比べ横穴式石室を内部主体とする群集墳の分布密度が低い当地域の課題を解決する端緒になるものと考えられ、丹後の古墳時代後期を考えるうえで不可欠のものである。

③ 墳墓群の立地

次に墳墓群の立地の問題について考えてみることにする。古墳や弥生時代の墳墓は、丘陵稜線上に立地し、横穴は斜面に営まれる。しかし、丘陵といっても、現在の耕地面からさほど隔絶した所には営まれず、平野部に隣接する低丘陵に立地し、竹野川流域などは非常によく似た景観を示している。第3表は、この関係を明らか

第2表 丹後半島の横穴地名表

	横穴(群)名	所在地 町 大字	基 数
1	長 柄	久美浜 長 柄	7以上
2	白 川	〃 奥三谷	4
3	谷	〃 谷	1
4	王 の 宮	〃 須 田	8
5	金 谷	〃 金 谷	1
6	三 反 田	網 野 下 岡	10以上
7	住 地	弥 栄 外 村	1
8	飛 谷	〃 堤	2
9	城ノ越	〃 〃	1
10	高尾坂	峰 山 橋 木	1
11	丸 山	〃 古 殿	1
12	八 幡 山	〃 荒 山	1
13	舟 泉 寺	〃 菅	3
14	目 谷	〃 新 治	8
15	船 山	〃 二 箇	1
16	宮 谷	〃 久 次	2
17	下 山	〃 五 箇	10
18	脇 谷	〃 〃	2
19	筏ヶ鼻	〃 鱒 留	3
20	大 田 鼻	大 宮 三 坂	30
21	有 明	〃 〃	6以上
22	丸 山	〃 上常吉	1
23	小 泊	伊 根 泊	1
24	庄 内	野田川 岩 屋	1
25	古 屋 敷	〃 三河内	3
26	玉 峠	〃 石 川	1以上
27	入 谷	加 悦 明 石	2
28	こもり穴	〃 温 江	1
29	有 熊	〃 加悦奥	6
計			119以上



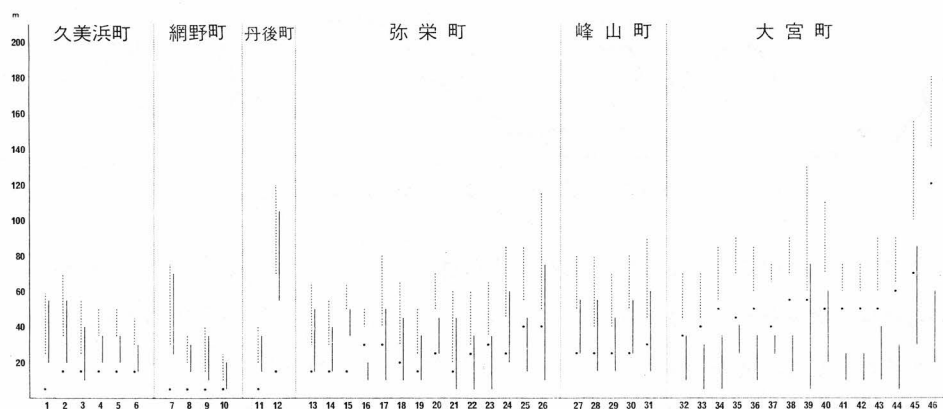
第4図 丹後半島の横穴分布図

にするために、10基以上からなる墳墓群(古墳群)の標高と、その立地する丘陵先端部付近の可耕地の標高を地図よりよみ取り、その比高を示したものである。同一墳墓群にも、レベル差があるため墳墓の標高については、最高所のものと最も低い位置にあるものとの範囲を示し、可耕地のそれについては、墳墓群の立地する丘陵先端部に最も近い耕作地におけるものを基準として、標高との差を比高で示した。これによると、丹後町矢畑古墳群、大宮町大内古墳群など若干の例外はあるものの、墳墓群のほとんどが標高20~90m、比高10~60m程度の丘陵に営まれていることが明らかとなる。このことは、この範囲にあてはまるすべての丘陵に墳墓が営まれたことを意味するものではないが、分布調査などにおける墳墓発見のひとつの目安となると思われる。

(2) 集落遺跡について

丹後半島における集落遺跡の発掘調査例はさほど多くない。丹後町竹野遺跡、平遺跡、弥栄町奈具遺跡、奈具岡遺跡、峰山町扇谷遺跡、古殿遺跡、途中ヶ丘遺跡、網野町松ヶ崎遺跡、浜詰遺跡、離遺跡、林遺跡、三宅遺跡、大宮町裏陰遺跡、正垣遺跡、宮津市中野遺跡、岩滝町千原遺跡、加悦町中上司遺跡などであるが、いずれも集落の全容を解明するよ

うな大規模な調査には至っていない。これを、その属する中心的な時代で分けると縄文時代は平・浜詰・裏陰、弥生時代は竹野・奈具・奈具岡・扇谷・途中ヶ丘・松ヶ崎・離・裏陰・正垣・千原、古墳時代は林・古殿、古代～中世は林・三宅・中野・千原となる。弥生時代は前期の竹野・松ヶ崎、前期末から中期初とされる扇谷、中期の奈具、後期の裏陰、全期間の土器が出土した途中ヶ丘とその数もバラエティーもかなり豊富であるが、他の時代は多くない。このうち注目されるものとして、縄文時代では、裏陰遺跡がある。この調査によって日本海沿岸のみに確認されていたこの時代の遺跡が、内陸部で確認された画期的なものである。その後、中野遺跡や千原遺跡、加悦町などでも縄文土器が発見されており、この時代の遺跡も今後さらに増えるものと思われる。古代～中世では、丹後国分尼寺跡との推定のもとで発掘調査の行われた中野遺跡で、古代～中世の豊富な土器が出土し、当地域の基準となっている。林・三宅・中上司・正垣などでは黒色土器が多数検出され、この時代の研究も盛んになりつつある。しかし、これらに比べ古墳時代の集落の調査例は



第3表 丹後半島における墳墓(古墳)群の立地

墳墓(古墳)群名(大字, 基数) 破線; 墳墓(古墳)群の標高 実線; 比高点; 耕作面の標高

- | | | | |
|-------------------|---------------------|------------------|--------------------|
| 1. 天王山(鹿野, 13) | 2. 大谷(一分, 13) | 3. 南谷(女布, 14) | 4. 谷垣(永留, 16) |
| 5. マンダラ B(永留, 10) | 6. サト A(永留, 11) | 7. 大谷(島津, 15) | 8. 遠所(島津, 11) |
| 9. 反崎(島津, 24) | 10. 白砂(島津, 15) | 11. 大山(大山, 10) | 12. 矢畑(矢畑, 25) |
| 13. 稻荷(国久, 16) | 14. 普甲(井辺, 16) | 15. 小宮谷(井辺, 11) | 16. 鳥取(鳥取, 15) |
| 17. 遠所(木橋, 15) | 18. 太田(和田野, 36) | 19. 福西(黒部, 20) | 20. コイロ(黒部・舟木, 19) |
| 21. 奈具岡(溝谷, 19) | 22. 小田屋(溝谷, 32) | 23. 立山(溝谷, 13) | 24. 茶カス(吉沢, 10) |
| 25. 新ヶ尾(吉沢, 14) | 26. スクモ塚(吉沢・内記, 30) | 27. 名木山(内記, 40) | |
| 28. 十三塚(橋木, 73) | 29. 湧田山(丹波, 28) | 30. 杉谷山(杉谷, 16) | 31. 麦ヶ谷(赤坂, 14) |
| 32. 口本し(善王寺, 12) | 33. 小池(善王寺, 51) | 34. 清漬(口大野, 30) | 35. 松田(河辺, 21) |
| 36. 小中田(河辺, 12) | 37. 今市(周枳, 15) | 38. 外尾(周枳, 24) | 39. 幾坂(周枳, 92) |
| 41. 枯木谷(奥大野, 21) | 42. 山本(奥大野, 23) | 43. 宮ノ森(奥大野, 39) | 44. 平太郎(奥大野, 11) |
| 45. 大内(三重, 16) | 46. 熊谷(久住, 10) | | |

少ない。丘陵に営まれた墳墓の数から考えると、かなりの集落が存在するものと思われるが、過去の調査例は古殿遺跡など数例にすぎない。古墳時代集落にとどまらず丹後半島において集落遺跡の調査例が少ない理由のひとつには、分布調査によって集落遺跡つまり土器散布地を見つけることがかなりの困難を伴う点にあると思われる。当地域では、田畑の分布調査を実施できるのは稲刈後積雪までの時期と雪解けから苗代までの期間であり、そのうち耕土が耕されて土器散布の状況が把握できる期間はさらに限られるのである。今回の分布調査も丘陵地域に焦点をあわせていることもあり、当地域における散布地の把握はまだ不十分であるが、今後上記の事情をふまえ、耕作者などに対するきめ細かな聞き取りによる調査方法や遺跡が立地する可能性が考えられる地域における積極的な立会・試掘調査などが必要に思われる。現状での散布地の確認状況では、大宮町を例にとると第1図の枯木谷遺跡・小中野遺跡・奥大野遺跡などのように丘陵縁辺部の微高地上で多く確認されている。発掘調査の行われた正垣遺跡・裏陰遺跡・谷内遺跡なども同じような立地を示し、扇状地や段丘などの微高地上に散布地が認められる状況は他町でも同様である。そして、これらは、丘陵稜線上に営まれた墳墓群と密接な関係があるものと推察され、「墓と村」の関係が一体のものとして解明されることもそれほど遠くないものと思われる。

(3) 中世山城について

丹後半島において、周知の遺跡として中世山城をとらえたものは、昭和47年版『京都府遺跡地図』が最初であろう。しかしこれでは、山城に対する考古学的関心が高くない時期であるうえ、調査方法の点からも広範に実地踏査をしたわけではないので、近世地誌類をもとにした郷土誌類の記述から、位置を示しているにすぎなかった。その後、舞鶴市在住の岡野允氏がほぼ丹後半島全域について、きめ細かい実地踏査によって、位置図や縄張図を作成され、その一部が発表されるようになり、全国的な傾向とあいまって、徐々に山城に関する関心が高まってきた。丹後半島において、山城跡の考古学的調査が最初に行われたのは、昭和53年の加悦町金屋の金屋比丘尼城跡の測量調査であり、その後、久美浜町浦明の浦明館跡、弥栄町木橋の木橋城跡、岩滝町弓木の弓木城跡などで地形測量や発掘調査が行われている。^(注5) また、京都府埋蔵文化財調査研究センターの第5回研修会(昭和57年3月13・14日)や第14回研修会(昭和58年5月21日)で、城館跡がテーマとしてとりあげられており、遺跡としての位置付けも広く認められるようになっている。

今回の分布調査では、昭和47年版『京都府遺跡地図』や岡野氏の業績をふまえ、山城跡を想定できるような地形の確認につとめた。しかも、平坦地や土塁、堀切を単に確認するだけでなく、第5図に示すようにその位置関係や規模を示す略測図を作成するように心がけて調査を実施した。郷土誌類の記述からはその位置を確認することができないものや

逆に、山城跡と考えられる地形が認められても文献には表われてこないものが多く存在する。この状況を具体的に示したのが、第4表の大宮町内の山城対照表である。過去の文献については、略図や略測図が収録され、存在が確実と思われるものについて欄を設けているが、同一のものを別のものとして掲げたものがあるかもしれない。また、今回の調査においても、三重城や森本城のように調査対象地外であるため確認できていないものもあるが、全体的にはより詳しく山城跡の把握ができつつある段階であり、他町においても同じ傾向にある。

3. ま と め

近年の分布調査や発掘調査を通じて感じたことを思いつくまに記してみた。各々の問題についてさらに深めるべき課題は多いが、当地域の考古学的調査の現状と課題という観点で簡単に整理を試みた。ここで述べたいずれの点においても、遺跡の種類は多岐にわたり、その数は増大していることが明らかであろう。また、分布調査の難しさについても、たびたび触れてきたとおりである。今回の分布調査ですべての地域をカバーできたわけではないし、すべての遺跡を把握しえたわけではないが、今後さらに密度の濃い徹底した分布調査が繰り返し行われ、遺跡の保存と活用が有意義に図られることを願ってやまない。拙文がその一助となれば幸いである。

最後になったが、本稿の浄書、図表の作成については、京都教育大学卒業生伊澤ひとみ



第5図 大宮町内の代表的山城跡略測図

上：下常吉城・上常吉城
中：河辺別城（饗野城）
下：北村城

第4表 大 宮 町 内 の 山 城 対 照 表

番号	名 称	大 字	① 丹後 旧事 記	② 一色 軍記	③ 村誌	④ 中郡 誌稿	⑤ 全集	⑥ 遺跡 地図	⑦ 岡野	⑧ 大系	⑨ 町誌	今回	備 考
1	善王寺城(平岡城)	善 王 寺	○	○	◎	○		○	◎	○	◎	◎	⑩
2	善王寺別城	〃			◎	○		○	○		◎		
3	小 谷 城	〃			◎	○		○	○		◎		1の南側丘陵
4	口大野城(大野城)	口 大 野	○	○	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	
5	口大野別城(口大野成吉城, 山崎城)	〃	○	○	◎	○		◎	○		◎		⑪に「一大野御城」
6	奥大野城(倉垣城)	奥 大 野	○	○	◎	○	○	○	○	◎	◎		
7	奥大野別城	〃				◎		○	○		◎		正垣遺跡西方丘陵
8	平 太 郎 城	〃									◎		平坦面3段城跡か否か不明
9	下常吉城(常吉城上常吉別城)	下 常 吉	○	○		○	○	○	○	◎	◎	◎	⑬に図と考察あり ⑬
10	上 常 吉 城	上 常 吉	○	○		○	○	○	○	◎	◎	◎	
11	河辺城(河辺本城神戸山城)	河 辺	○	○	○		○	○	○	◎			
12	河辺別城(譽野城)	〃			○	○		○	○	◎	◎		河辺城として既報
13	小 谷 城	〃								◎			
14	北 谷 城	〃									◎		
15	木積山城(周枳別城)	河辺, 久住 周枳, 明田	○	○	◎			○	○	◎	◎		
16	主基城(周枳城)	周 枳	○	○	◎	◎	○	○	○				
17	北 村 城	〃				◎			○	◎	◎		周枳城として既報⑨では周枳城とする
18	小 杉 山 城	〃	○		◎	◎	○	○	○				
19	三 坂 城	三 坂				○			○	◎			⑭
20	谷内城(鶴賀城, 鶴ヶ城)	谷 内			◎	○	○	○	○	◎	◎		
21	三重城(三重村城)	三 重	○	○	◎	◎	○	○	◎	○	◎		
22	三重北城	〃									◎		
23	森 本 城	森 本			◎			○	○	○			
24	明 田 城	明 田			◎			○	○	○			
25	延利城(向山城, 縁田山城)	延 利			◎	◎		○	○	◎			
26	延利東城	〃				◎			○				
27	高 森 城	〃								◎			
28	古 城	〃								◎			
29	五十河城	五 十 河				◎		○	○				
30	久住別城	久 住				◎		○	○				

番号	名 称	大 字	① 丹後 旧事 記	② 一色 軍記	③ 村誌	④ 中郡 誌稿	⑤ 全集	⑥ 遺跡 地図	⑦ 岡野	⑧ 大系	⑨ 町誌	今回	備 考
31	久住城(久住別城)	〃				◎			○	○	◎	◎	④に「本字東方五十河界」とあり
32	久住日ヶ谷城	〃										◎	
33	中 谷 城	〃									◎		

- ① 『丹後旧事記』(天明年中成立『丹後史料叢書』第一輯所収)
 ② 『一色軍記』(文化3年写『丹後史料叢書』第一輯所収)
 ③ ④所収の「村誌」の項
 ④ 京都府丹後国中郡役所『丹後国中郡誌稿』(1914)
 ⑤ 中島至編「京都府の城」(『日本城郭全集』第8巻 1967)
 ⑥ 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』(1972)
 ⑦ 岡野允『丹後の山城 図録篇 旧与謝・奥三郡の部』(『舞鶴地方史料集 第12輯』昭和53年)
 ⑧ 『日本城郭大系』第11巻(新人物往来社 1980)
 ⑨ 『大宮町誌』(1982)
 ⑩ 『丹哥府志』
 ⑪ 『丹後国御檀家帳』
 ⑫ 『常吉小学校廃校記念誌』(同編纂委員会) 1980
 ⑬ 『丹後一覽集』
 ⑭ 『三重郷土誌』

氏の協力を得た。記して感謝したい。<1986.1 脱稿>

(岡田晃治＝京都府教育庁文化財保護課技師)

- 注1 『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1972 以下、昭和47年版『京都府遺跡地図』と記す。
 注2 『埋蔵文化財発掘調査概報』(1982～1986) 京都府教育委員会
 注3 豊岡市七ツ塚古墳群・妙楽寺墳墓群・北浦古墳群・立石古墳群などがある。
 注4 岡野 允「丹後における中世の山城について」(『両丹地方史』第23号 1976.2)
 岡野 允「丹後における中世の山城について(続)」(『両丹地方史』第25号 1977.7)
 をふまえ岡野 允『丹後の山城』全4冊(図録篇2冊 城譜篇2冊) 1978～1980がある。
 注5 杉原和雄「(付)両丹地方の中世城館跡発掘調査」(岩滝町教育委員会『丹後弓木城』岩滝町文化財調査報告 第5集 1983)